

# 大阪

あんなとこ  
こんなとこ

『川口』

異国情緒漂う居留地と言えば横浜、神戸の港町が思い浮びますが、大阪にも居留地があった事をご存知でしょうか。明治の初め、大阪の文明開化の中心は居留地のあった川口一帯でした。今回は、旧居留地川口について調べてみました。

## 旧居留地川口

江戸時代、大坂が「天下の台所」といわれた頃の川口は、「当津は晴天には朝に東風ありて出帆に便よく、暮には西風に変ずる故に入船に便よし。ここをもって日本一の大港とす」といわれた船着場であったと『撰津名所図会大成』にあり、幕府の官用地として船番所・船蔵や、船奉行をはじめ与力・同心などの屋敷があつたそうです。

五力国条約により、安政5年(1858)に日米修好通商条約が締結されて大坂は、函館、新潟、東京、横浜、神戸、長崎と共に開市されることが決まりました。大坂の開市は、慶応3年(1868)、開港は翌年のことでした。開港と同時に川口町一帯は外国人居留地と定められ、26区画の永代借地権が諸外国へ競売されたといえます。ほどなく街は、下水道、街路樹やガス街灯、洋館が並ぶ西洋の街へと整備されました。また、居留地に接する本田、富島、古川、梅本町も外国人雑居地となりました。

最初の入居者には、商人が多く、牛肉、牛乳、パン等の食料品や靴、洋服など、当時の日本人には珍しい商品が売買され、人々を驚かせたそうです。

川口の居留地は、水深の浅い河口港であつた為、大型船が入港できず次第に外国人貿易商たちは大型船が入港できる神戸港の方に移住していきました。その後、貿易商に代わりキリスト教師が定住。教会を建て、布教を行いました。その一環として、平安女学院、プール学院、桃山学院などのミッションスクールや聖バルナバ病院等が創立されました。明治32年(1899)に居留地制度が廃止された後は、華僑が進出し、中国人街となり、中国料理店や理髪店が多くなりました。しかし、日中戦争の激化などで多くの人々は帰国。大阪大空襲で焼け野原となった戦後、残った人々も大阪市内各地に拡散し、川口は倉庫街となつたそうです。

現在、川口周辺で居留地の繁栄を残す物は無く、川口キリスト教会や本田小学校の一隅に「川口居留地跡」の石碑が立っているのみです。



川口教会

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞